第Ⅲ章

思い出アルバム

思い出アルバム①

主な出来事・写真

昭和40年代～昭和50年代

生活（心配ごと）相談所の相談風景（昭和41年）

外記丁庁舎（現在の錦町庁舎）に事務所移転（昭和43年）

仙台市社会福祉大会での感謝状贈呈（昭和44年）

生活（心配ごと）相談所の相談員研修（昭和44年）

第9回歳末慰安演芸大会での日本舞踊（昭和47年）

日本赤十字社から配備された「はくあい号」（昭和54年）

（株）時計宝石の大井様から掛時計の寄贈（昭和54年）

「黄色いハンカチ運動」の電光ニュース（昭和57年）

昭和60年代～平成初期

第21回仙台市社会福祉大会（昭和61年）

「福祉号」寄贈式典（昭和62年）

戦災復興記念館の3階にあった本会事務所
（昭和62年頃）

戦災復興記念館内に開所した市VC（昭和62年頃）

ボランティアワークキャンプ（平成5年）

福祉教育研修会（平成6年）

訪問入浴サービス（平成6年）

ボランティアまつり（平成7年）

平成 10 年代

地区社会福祉協議会研究協議会（平成10年）

ホームヘルパー養成研修（平成11年）

泉福祉まつり（平成11年）

仙台市権利擁護相談センター開所式（平成11年）

創立50周年記念式典・祝賀会（平成13年）

新潟豪雨災害への被災地社協応援派遣（平成16年）

地下鉄構内に電飾看板広告の設置（平成17年）

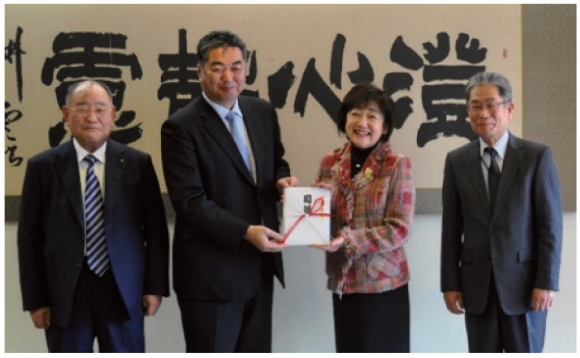
市VCが福祉プラザ4階に移転（平成19年）

平成 20 年代～令和

地域支えあいセンター事業開始式（平成23年）

国連防災世界会議関連事業への協力（平成26年）

企業の社会貢献・CSRセミナー（令和元年）


阿部和工務店様から車両の寄贈（平成29年）

ジャパンゴルフツアー選手会様から車両の寄贈（令和元年）

第5次地域福祉活動計画策定委員会（令和2年）

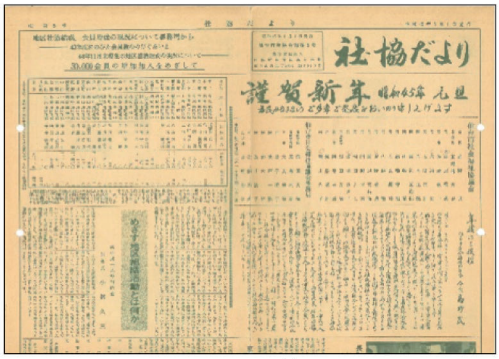
コロナ禍で開催した仙台市社会福祉大会（令和2年）

第3期市民後見人養成研修（令和3年）

広報紙の歴史

福祉仙台第3号
（昭和42年2月1日発行）

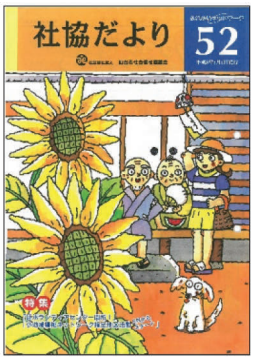
社協だより第3号
（昭和44年3月20日発行）



社協だより第5号
（昭和45年1月1日発行）

社協だより第43号
（平成5年3月15日発行）

社協だより第46号
（平成6年8月1日発行）



社協だより第52号
（平成8年8月1日発行）

社協だより第61号
（平成14年1月15日発行）

青葉区社協だより
「あおば」

青葉区社協宮城支部
だより「Oh！でっ手」

宮城野区社協だより
「みやぎの」

若林区社協だより
「わかばやし」

太白区社協だより
「グリーンウェーブ」

泉区社協だより
「いずみ」

社協だよりせんだい
第4号（平成30年2月発行）

社協だよりせんだい
第14号（令和4年4月発行）

思い出アルバム②

退職された先輩のお話　阿部 達 様

阿部 達（あべ とおる）さんは、昭和 35 年 4 月に仙台市に入職し、最初に配属された民生局社会課で仙台市社会福祉協議会の業務に関わりました。以後、福祉事務所のケースワーカー等を経て、昭和 60 年度から 3 年間は、現職派遣として本会の常務理事兼事務局長を務め、宮城町社協との合併や泉市社協との組織一本化にご尽力いただきました。

仙台市を退職後は、仙台市ボランティア連絡協議会会長などを歴任し、現在も本会の評議員選任・解任委員会の委員としてご活躍されています。

今回は、当時の懐かしい話や仙台市社協への思いを語っていただきました。（聞き手は、加藤正彦総務部長、斉藤淳総務係長）

第一部「法人設立当時の思い出」～仙台市民生局社会課時代～

――はじめに阿部さんと社協の出会いからお話しいただけますか？

阿部さん（以下、敬称略）：私が仙台市役所に採用されたのは昭和 35 年 4 月 1 日で、当時の民生局社会課に配属されました。社会福祉法人の仙台市社協が誕生（昭和 35 年 2 月）したばかりでありまして、上司の社会係長から職場の紹介をされた時に、「社協の仕事も手伝ってもらうから」というお話をいただきました。また、社会課の先輩職員からも、社協への関わりが増えてきているから一緒にやろうという励ましの言葉をいただいたことを覚えています。

当時、社協の事務所は社会課内にあって、専任職員としては兼子澄子さん、牧戸一弥さんのお 2 人がおられたと思いますが、私は新採の職員だったのでさっぱりわかりませんでした。

牧戸さんからは「仕事はいっぱいあるので、退屈しないから」と言われました。今はコンピュータの時代ですけれども、私が就職した時はまだ「ガリ版切り」―いわゆる「ガリ切り」の時代でした。民生委員や日赤、共募など、社会課でやっている社協の仕事はみんなガリ切りなんですよね。案内状から役員会から、カリカリと一生懸命書くんですけれど、今みたいにパソコンを使えば去年の文章なりをちょっと直せば「てにをは」は大丈夫ということになるのですが、日付も含めて一字一句ガリ版に鉄筆で刻んでいかなければならなかったんですね。

60 年以上前の出来事をまるで昨日のようにお話されていました

私が社会課にいたのは 1 年 2 か月くらいで、その後福祉事務所の生活保護ケースワーカーに異動したんですけれども、その間、社協の仕事の思い出としては、ガリ切り、あとは会議があればお茶を出して、後片付けをやったことなどでしょうかね。

第二部「現職派遣の３年間の思い出」～本会常務理事兼事務局長時代～

――その後に社協に関わったのは、昭和 60 年頃でしたでしょうか？

阿部：社協とのご縁は、仙台市が政令指定都市になる前の昭和 60 年から昭和 63 年までの 3 年ほど、仙台市職員として現職派遣されお世話になりました。その時には、かつて仙台市の助役を務められた小岩忠一郎さんが、社協の会長に就任されておられました。これまで「社協の会長は仙台市長」でしたが、小岩会長から市長以外の方が社協会長に就任するということになりました。小岩さんは 5 年ほど会長をされ、その後は熱海 昭（元仙台市助役）さんが会長を務められましたね。

指定都市社協になる時には、私としては区の社協に法人格を与えたいと思っていました。

当時の厚生省（今の厚生労働省）の立場は、政令指定都市の各区の社協に法人格を与えて、区ごとによい仕事を積極的にやってほしい―そんな理解をしていまして、私も憧れましてね。でも、小岩会長には要らないと言われましたけど（笑）。

結果として実現できませんでしたけれども、今あらためて考えてみると、必ずしも区社協の法人化がうまくいったかどうかというと、うまくいったとは思っていません。やっぱり厚生省の願いが早すぎたのかもしれないと想像してますけどね。

――宮城町社協や泉市社協との合併については、かなり苦労されたのではないですか？

阿部：仙台市と最初に合併したのは、昭和 63 年 10 月の宮城町でした。当時町長であられた庄子守さん（後に県議会議員）は、合併後は仙台市顧問に就任されました。合併してから市役所 1 階の顧問室でお話しする機会がありましたが、庄子前町長は、やっぱり市町村合併をしたんだから、社協をはじめ関係する団体も一体化して、一緒に活動することでいいんじゃないかというお考えは持っていましたね。ただ、これまで宮城町社協で基金をいっぱい集めたんだけれども、それを全て仙台市社協に持っていかれることに少し残念な気持ちが残っていたようでした。町民の人たちから募金していただいたものですから、それを取り上げてしまうことに対しては、当然だと思いますね。

泉市の場合も同じようで、特に泉市社協ではもっと積極的にお金を集めて仕事がたくさんできる社協にしようと意気込んで仕事に取り組んでいた矢先に合併でしたから。きっと社協関係者には合併に反対の方が多かったのではないでしょうか。

そういうことで、泉市社協サイドとしては、基本的には両市合併の流れはわかるけれども、一方で、法人格のある社協として、基金は手放したくないと

泉市社協との合併懇談会の様子（昭和 63 年）
写真右端が阿部達さん

いう思いがあったんでしょう。協議がまとまるまでには時間がかかりました。結局は、名義的には仙台市社協に一本化するが、泉市社協は法人格を有したまま泉区社協として存続させるということで落ち着いたように覚えています。

数年前に、現会長から「阿部さん、昭和末の社協一本化の時の懸案事項は市区社協を統合することで決着しましたよ」と言われて、そういえばそんなことがあったんだなぁと懐かしく思い出しましたね。

当時は、一本化するのはよいことなんだけれど、お金を集めた人たちも出した人も、何か余所からトンビが来てさらっていかれるような残念な思いが強かったのではないでしょうかね。

そういう意味では、市町村合併にしても、関係する団体の合併にしても、人脈やお金のつながりということが関係してくるので、なかなか難しいものですよね。

――合併以外のことで、当時何か印象に残っているようなことはありますか？

阿部：社協の活動とは直接関係はない話なのですが、社会福祉法人八木山福祉会の誕生のことが強く印象に残っています。時期は多少前後するかもしれませんが、当時の宮城県社協の大槻会長（元宮城県副知事）と小岩会長とは学生時代の同期かその前後かという関係で親しくされていて、共に県・市の社協会長なんだから、会長を務めている間に何か一仕事をやろうということになったようです。社会福祉法人を設立するために、募金をして回って、それを基本財産に県や市から補助金を得て、福祉施設を立ち上げようということでしたが、その道半ばで大槻会長が急逝されました。

残された小岩会長は、大槻会長との約束だからと言うことで、中心となって募金を募り、八木山福祉会という社会福祉法人の設立に至りました。その後、仙台赤十字病院の敷地の一角に老人福祉施設として八木山翠風苑を誕生させたわけです。あの頃はまだ特別養護老人ホームなんて、あまり関心を持っている人も多くはなかった時代でしたが、小岩会長と大槻会長が揃ってはじめられたことが結実しました。

この間、体調が万全ではなかった小岩会長がとてもご苦労された姿が今でも特別な印象をもって思い出されます。30年ほどを経て、八木山翠風苑も別の場所に移転新築され、特別養護老人ホームとして経営を続けておられますね。

――当時、老人福祉センターを全て社協で受託しましたが、何か理由があったのでしょうか？

阿部：市の方針だと思います。市が運営していた施設を公共的団体である社協に委託したいというので、受ける社協側としても、事業の裾野が地域に広がるチャンスにもつながるとの判断もあったのでしょう。

当時はまだ委託先となる公共的団体が多くなかったので、社協として受け入れることになったわけで、市の直営施設をどんどん公共的団体にその運営を委ねるという流れがあったことも否めないと思います。副会長であった安彦ひさ子さんもどちらかというと推進派だったんじゃないかな。

――1番印象に残っている出来事は何ですか？

阿部：この福祉プラザのビルを建てることになったことかな。当時、都市整備局の次長をやっていた私の同期の村上茂さんが、ある時「阿部さん、社協はずっとあそこ（当時事務所があった戦災復興記念館）でいいのすか？」と言われたので、「福祉会館のような建物に、社協の本部があって、あるいは場合によってはそれを取り巻く社会福祉団体が一緒に入って、社会福祉会館を構成する。社会福祉大会なんかもそこでできるような立派な会館が欲しいね、政令指定都市だから」なんてほざいたら、村上さんが都市整備局で議論してくれて、社協の阿部はこういう願いを持っていて、筋は立つんではないかということで、社協の本部を中心に社会福祉団体が入居して、活発に福祉活動ができる場を作ってやろうよ、とトントン拍子で。私一人の主張だけではないでしょうが、当時の山口民生局長も「ぜひに」とすぐに賛成してくれて、あっという間に話が進みましたね。

――福祉プラザは平成6年開館ですから、本当にあっという間でしたね？

阿部：ですから、社協にとって、あるいは仙台市において社会福祉事業に係わる関係者にとっても、この福祉プラザはとてもよい時代に施設を作ってくださったと思ってますけれどね。私が言い出しっぺとまでは言わないですが、発案に多少なりとも関わった者として多少自負しています。

――ところで、昭和60年にはボラントピア事業が始まりましたが、そのきっかけはどういう事情だったのでしょうか？

阿部：背景としては、全社協がボランティア活動の振興に力を入れていたこともあったように思います。たぶん但木先生あたりではないでしょうかね。つまりあの頃は「街にボランティアを」という大きな世の中のうねり、流れがあったんじゃないかと思うんです。

但木卓郎先生は、宮城県社協の常務理事まで務められた方で、県社協においてボランティア事業を広げたいというお考えをお持ちだったと思いますが、任期満了により常務理事をされました。その後、小岩会長との関係があったのかどうかはわかりませんが、私が社協に来る1年前くらいに、但木先生が中心となって仙台市のボランティア団体連絡協議会を立ち上げようということになったと聞いています。

――ボランティア連絡協議会は、昭和60年の7月8日に発足、その年の12月がボランティアセンターの開所でしたね。

阿部：ボランティアセンターについて言えば、後に仙台市議会議員になった関根千賀子さんが、事務員として活躍されていたね。彼女が但木先生のもとでボランティアセンターを立ち上げて、活動が始

まりました。

但木先生の力が大きかったのは言うまでもありませんが、関根さんが事務的に但木先生をしっかりサポートしていた―そんな風に記憶しています。他の都市と比べたことはないのですが、仙台のボランティアセンターは他都市に比べても早い時期にスタートしたのではないかと思っています。

――ボラントピア事業は、ボランティアで福祉のまちづくりをやろうということで、仙台市がその第一号としての指定を受けたということでした。

阿部：そうでしたか。さすが現役の皆さん方のほうがしっかり勉強されていますね（笑）。

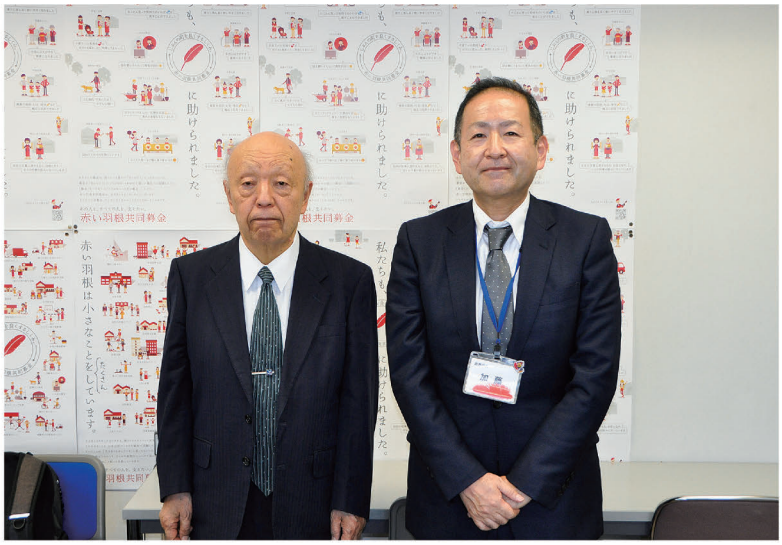
最後に「これからの社協に期待すること」

――今回の記録誌は、今いる職員やこれから社協に入る職員にも読んでもらおうと思っています。最後に、これからの社協に期待すること、職員に期待することなどをお話しいただけますか？

阿部：やっぱり時代が厳しくなってきていますけれども、市民の社会福祉活動っていうのは、とても大切だと思いますね。社協という存在は、それを引っ張ったり支えたりする大事な活動の拠り所じゃないかと思います。市民の方々も、市長や行政にはなかなか直接言いにくいけれども、社協の皆さんにはより気軽に相談できるのではないか、というような期待感は今でもあると思ってみていますが、現役の職員としてどんなもんでしょうかね。

後輩の皆さんに期待することは、私がいた頃に比べて組織も大きく仕事も複雑多岐に広がっていますが、基本は何といっても職員一人ひとりの仕事に向きあう姿勢であることには変わりありません。市民の福祉活動が高まるように努力を続けていってほしいですし、そして社会福祉活動はやっぱり社協だよねと言ってもらえるような社協を目指して、これからも頑張ってほしいと思います。

――今日は貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。



阿部達さん（写真左）と加藤正彦総務部長

思い出アルバム②

退職された先輩のお話　牧戸 一弥 様

牧戸 一弥（まきと かずや）さんは、大学卒業後、仙台市の臨時職員を経て、昭和 36 年市社協の正職員に採用されました。現役時代は総務課長などを歴任された後、定年後も嘱託職員として青葉区事務所長を務められ、平成 13 年 3 月に退職されました。

今回は、寄稿をよせていただくとともに、入職された昭和 30 年代から在職当時の思い出や市社協への思いなどを語っていただきました。（聞き手は、岩渕徳光事務局次長、加藤正彦総務部長、斉藤淳総務係長）

入職したときからの思い出

――牧戸さんが市社協に入られたときのことをお話しいただけますか？

牧戸さん（以下、敬称略）：（当時の書類を見ながら）私が仙台市の臨時職員として入職したのは昭和 34 年で、社協が社会福祉法人の認可を受ける少し前でした。社協には 35 年に臨時職員として入り、そのあと 36 年に書記という職名で採用されました。私の前にはひとり職員がいて私は社協職員の第 2 号です。そのほかはみな市役所の社会課の人で、社協の職員数がそろってくる 39 年ごろまで兼務で社協の仕事をしていました。私が入職した昭和 34 年の頃は、法人格の取得に向けて社会課の職員が申請書類を作っていた頃ですが、私は入ったばかりでよくわかりませんでした。事務所は社会課と一緒で、木造の建物の中に入っていました。

そのあと昭和 43 年に外記丁（げきちょう）にできた現在の錦町庁舎 3 階に移ったとき初めて社協として独立した事務所を持ったのです。そのあと戦災復興記念館の開館（昭和 56 年）と同時に事務所がそこの 3 階に移りました。同じフロアには仙台市社会事業協会の事務局もありました。

――当時どんな事業を行っていたのですか？

牧戸：寄稿文にも書きましたが、全国的な世帯更生資金（現在の生活福祉資金）や仙台市独自の社会福祉資金などの貸付と、委託事務として、今は団体の名称が変わっているかも知れませんが日赤や共同募金、身体障害者福祉協会、母子福祉会、遺族会など福祉団体の事務局を委託されていました。

古い資料をみながら思い出を語っていだきました（写真左が牧戸さん）

――印象に残っている出来事を教えてください

牧戸：一番印象に残っているのは、社協本来の仕事ではなく日赤の担当者として北朝鮮への帰還事業に関わった時のことです。太平洋戦争が終わったあと、北朝鮮国籍があって希望される方を帰還させる全国的な事業を日本赤十字社が担いました。仙台市においてその窓口となったのは日赤の仙台市地区で、その事務局を担当していた私が申請受付等の業務にかかわることになりました。何年間その仕事をやったかは忘れてしまいましたが、日本で結婚された家族の方などもいて、多いときで月に10から20人ぐらいと記憶しています。帰国者の方々は日赤県支部が新潟まで鉄道でお送りし、新潟から船で帰国されましたが、かの地が夢と希望をもって帰国された方々が願う国であるよう、私も願って送り出したことが思い出されます。

それから高齢化社会が進むということがかなり前から予想されていて、高齢化率が10年間で7%ぐらいずつ上がっていくとか、人口の40%以上になるということが言われました。老人福祉の機運が高まるなかで老人クラブの結成が全国的に進み、仙台市にも連合会組織ができました。

次に、昭和53年の宮城沖地震のことです。大きな都市で発生した災害ということで色々なところからさまざまな職業の方が支援に集まってくれました。いまでいう災害ボランティアのはしりだったと記憶しておりますし、昭和60年のボランティアセンターの設置にもつながっていったのかなと思います。

それから、秋保町、宮城町、泉市の各社協との合併がありました。このとき市社協の会長は小岩忠一郎さんで私は総務課長でした。合併協議会には各社協の会長、副会長、理事に出席いただき10回くらい協議したと思います。行政のほうが2市2町の合併にまい進しておりましたので、当時の会長・理事の方々は社協も一緒になるのだろうという認識をもっておられ、行政に引っ張られる形で比較的スムーズに進んだと思います。

――地区社協の設置についてはどうですか？

牧戸：当初の地区社協は、当時の地区民児協の総務さん（現在の地区民児協会長）が単位町内会や連合町内会の会長さんに協力してもらい、つくっていただいた経過があります。最初の地区社協ができたのが昭和43年ですので、当然つくろうという動きはその前から行っていました。社協には会員会費制度がありますが、地区社協を通じて社協会員になってもらおうという考えもあったようです。あのときは夜にも各地区に出かけていって説明したりしましたね。

――地区社協の設置を進めるための当時の説明資料が残っています

牧戸：（昭和 42 年発行の「地区社会福祉協議会（支部）設置のすすめ」に目を通しながら）これは事務局次長をされた馬場さんが作られたものですね。馬場さんは県内の小・中学校の校長をつとめた方で地区社協をつくろうと一所懸命やってくれた方です。私と馬場さんは福祉活動専門員に任命されていました。いま改めて読んでみると、地区社協をつくろうという熱い思いが文章からも溢れていますね。

今の職員へのメッセージ

牧戸：少子・高齢社会のなかで地域での福祉というのが本当に大事になってくると思います。社協職員は、わたしたち住民のことをよく見ながら、地域のために活動してください。

――今日は貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。

インタビューのあと昭和の終わりごろ新人だった職員たちと記念撮影
（左から後藤伸、柳谷那由美、児玉康伸、牧戸一弥さん、加藤正彦、岩渕徳光）

寄稿「思い出すこと」

～70周年記録誌の発行によせて～

牧戸　一弥

社協の思い出を少し記してみたいと思います。市社協が法人格を取得する頃は、仙台市役所の社会課に事務局があり、社会課の職員が社協の法人化の事務を扱っておりました。当時の社協の事務は、世帯更生資金貸付・社会福祉資金貸付と委託事務として日赤仙台市地区本部・宮城県共同募金会仙台市支会・宮城県身体障害者福祉協会仙台市支会・日本遺族会仙台市支会等の事務を受けていたように思います。

私の思い出は、日本赤十字社が戦後（太平洋戦争）日本に残った北朝鮮国籍の家族の方々が祖国に帰還する事業を日赤が委託され実施したのですが、各市町村が窓口となり手続きを進めました。帰還を希望された方々は明るい夢を持ち祖国へ向かいました。皆様の願う国であるように願ったことが思い出されます。

その後、高齢社会を迎える対策の一つとして老人クラブの結成が全国的に進められ、連合会が誕生して活動を展開するようになりました。

宮城県沖地震（昭和53年6月12日）は、全国的にボランティア活動を広めた災害だったと思います。ボランティアセンターが設置され、「災害ボランティア」という言葉もこの頃生まれたのではないでしょうか。

仙台市社協と秋保町、宮城町、泉市の各社協との合併は、先に秋保町との話し合いが進み、続いて宮城町、泉市との話し合いが進みました。行政の合併が急速に進み、社協もそれぞれ10回ぐらいの会合が持たれましたが、当時の理事の方々も前向きに協議されていたかと思います。

以後、阪神・淡路大震災、東日本大震災等をはじめとして地震や風水害等が時期を問わず全国的に発生するようになりました。社会福祉は、時代とともに内容を変化していきます。その時々のニーズに対応していく必要があると思います。少子・高齢化社会を迎え、地域で活動をされている民生委員児童委員の方々や地区社協など地域の皆様で安全で安心して生活できる地域社会を構築していただきたいと願っております。